

イエスは彼らの思いを知ってこう言われた。

「どんな国でも、内輪もめして争えば荒れすたれ、
どんな町でも家でも、内輪もめして争えば立ち行きません。」

マタイの福音書 12 章 25 節

支援の中に潜む『内輪もめ』

先日、ベテスタとシャロンを統廃合して、新しいグループホーム（アドナイ・イルエ館）が発足した。日中サービス支援型ということで、かつての精神障害者グループホームとしての形も変わることとなった。65歳以上で精神障害があり、かつ介護の必要な方を受け入れる。介護施設では一般的な話だが、これまで主に精神を支えることを活動の柱としてきたグループホームにとっては青天の霹靂であり、職員の中にも動揺が走った。

その方が介護に対する抵抗から職員に暴力を振るうこともあるという情報は、小さなことも大きく見せてしまう噂の形で法人中を駆け巡った。これにより協力的な職員と非協力的な職員が顕わになり、「障害を持つ人のために」と選んだはずの職場の中に悲しい現実が見えてきた。

物事には流れがある。そこで良い流れが起きますようにと祈らせられた。まず立ち上がってくれたのが、そのホームのリーダーだ。ちょうど家族の中で大きな出来事が起きていたにも関わらず、「引き受けた以上はあきらめずやりましょう」と言ってくれた。こういう献身的な職員のゆえに困難な人々が今、ハートフルトポスにいるのか、とつくづく思わされた。

リーダーの働きかけによって、職員たちの間にも介護への支援と理解は徐々に進み、正式な入居は1か月間の体験利用によって判断することになっているのだが、結果として引き受けることになった。もし、噂や誤情報で非協力的な流れに乗ったままであったとしたら、職員同士の内輪もめとなり、ホームの運営自体も立ち行かなかっただろう。

一人のリーダーの決意が内輪もめから守り、一人の障害者の人生を守ったのだ。

2025年12月 恵日